

愛しのはずれ歌

大阪府

打浪 紘一

今から四十年前も前のことである。私はある銀行の外交係として忙しい毎日を送っていた。その支店では、毎年、忘年会が開催され、出納、普通預金、定期為替、庶務貸付の各係がチームとなつて、何か余興をやるのが恒例となつていた。

外交係は各チームの世話役として、出し物を決め、練習の準備を担当するのである。入行して二年目の私は庶務貸付チームの担当になつたが、正直気が重かつた。

他の係には若い女子行員が多く華やかなのに、庶務貸付係はほとんど五十歳前後の大先輩で占められており、若い女子行員と言えば二十一歳の越栄さんただ一人だつたのだ。

もともと庶務貸付係は預金部門に比べて地味な部署だ。融資という重要事項を扱うため、経験豊かなベテラン行員が配置されるのが常である。また、借り入れの相談に来店するお客には、うつむき加減な人もいる。そんなお客の接待には、店で一番もの静かで控え目な越栄さんがうつつけで、貸付係に配置されたのもうなずけるのだ。

だが、こと忘年会となるとそれでは困るのだ。メンバーの最年長は庶務主任の松田信三さん（五十三歳）、次いで貸付主任の小西康子さん（四十五歳）以下、谷川邦子さん（四十二歳）西重雄さん（四十二歳）広松民江さん（四十歳）そして越栄道代さん（二十一歳）と、おじさん、おばさんが主力なのである。

支店長から出来栄えにより金一封が出る聞いて、各チームの練習熱は一気に高まつた。出納係はコーラス、普通預金係は寸劇、定期為替係はマジックと決まつたが、私のチームは「打浪君にまかせるよ」と言つたきりだ。

そんな時、たまたま上演していたミュージカル「レ・ミゼラブル」をみて、いたく感動した私は、あろうことか「ミュージカル」をやりますとみんなに宣言してしまつたのだ。台本は私が作つた。挿入歌はみんながよく知っている童話や歌謡曲の替え歌にした。あとは簡単な演技をしてもらえば、ミュージカルらしくなると思つたのである。

だが、その考えは甘かつた。練習を始めて分かつたのだが、この年代の先輩たちはみんな恥ずかしがりで、譲り合うばかりで、ちつとも前に出て歌おうとしないのである。

ストーリーは単純で、一人の新人女子行員が、色々な失敗を重ねながらも、周囲の励ましで一人前に成長する姿を描いたものだった。

いわば、自分たちの歩みを、再現すればいいのだが、セリフは棒読み、演技はまるでロボットのようなぎこちない動きになつてしまうのだった。（なんとかならへんやろか）

お酒が入ると大声で歌う松田さんの声は消え入るようで、女性陣も蚊の羽音程度の音量

しか出ない。これはミュージカルではない。

「あきません、そんなんでは」と私がつい声を大きくすると、小西さんから「そんなこと言うても、私らミュージカルなんて初めてやもんなあ。無理やわ」とやんわり反撃される。若造の言うことなどまじめに聞けるか、と反発されたようで私は絶句し傷ついた。

やむなく、おとなしい越栄さんに、とにかく大きな声で歌ってくれと頼んだ。彼女はもじもじしていたが、意を決したかのようにびっくりするような大きな声で歌い始めた。彼女なりに私の窮状を見かねたのだろう。

その歌は完全に音程をはずれており、ひどいものだったが、「越栄さん中々いいよ。それで頼むよ」と私は彼女を励ましたのだった。

やがて、無情にも忘年会の日がやってきた。

プログラムを見た先輩に、「これは打浪君の演出やな。楽しみや」などと言われ私は逃げ出したい気分だった。

各チームとも出来栄えは中々のもので、会場には拍手が湧き上がった。

いよいよ私のチームの出番が来た。大事な最初の場面、道端に倒れた老女を、通りかかった女子行員が助けるシーンだ。練習では全く駄目だった老女役の小西さんが、見事に演じてくれた。松田さん、西さんのバリトン、谷川さん、広松さんのアルトもよく通った。みんな家で余程練習してきたのだろう。

舞台のそでで見えていた私は胸にこみ上げるものを抑えられなかった。入社してわずか二年の若造が書いたつたない台本を、大先輩たちが一生懸命演じてくれている。その喜びは預金を獲得できた時よりはるかに大きかった。

最後に越栄さんが、完全な調子はずれながら、堂々と「夜明けの歌」を歌いあげ、私たちのチームはやんやの喝采を受けたのである。

隣の部屋から大正琴の音色が響いてくる。六十八歳の妻が二年前から習い始めたのだ。

時折音程をはずれ、リズムが乱れる。

「変わっていないなあ」と思う。あの忘年会から三年後、私は越栄さんと結婚したのだ。

妻のたどたどしい演奏を聴くたびに、私の脳裏には若き日のよい思い出が蘇るのである。